

第3回里地里山保全・活用検討会議 議事概要

日 時 平成21年3月4日(水) 14:00~17:00

場 所 砂防会館

議 題

1. アンケート調査結果の分析(暫定)について
2. 全国の里地里山の現状分析について
3. 里地里山の保全再生に向けた課題等について
4. 里地里山の伝統的な利用管理手法について

○議題1. について

<事務局資料説明>

<質問・意見>

【委員】

- ・取組主体の選択肢として挙げている「伝統的コミュニティ」は、昔からの地縁的な組織を想定していたのなら、少し違っているのではないか。「伝統的」というと特別の作法とかを想像してしまう。定義なしで使うと誤解を与えるかもしれない。

【委員】

- ・伝統的な地域コミュニティが残っていて、普通の農山村で比較的健全に農林業地の管理をやっているようなところは、このアンケートでは出てこないのではないかと。当たり前すぎて。

【委員】

- ・取組目的のなかで「農林業の維持・活性化」を挙げているが、内容として環境に配慮した農業林業をやっているかどうかまで聞いているのか。
事務局 → アンケート回答には環境保全型農業の事例が多く上がってきている。また、普通の農山村で地域活性化に向けていろいろな取組をやっている例もかなりある。

【委員】

- ・特徴的取組というアンケートなので結果はこういうものになるかと思うが、これで本当に環境省として生物多様性保全の目標を推進していくための地域の特定に役立つものになるのか。
- ・野生動植物の生息地保全管理の事例が結構あるのは良いが、大都市周辺が多い。中山間地のほうに大事な場所が多いと思うが、これでちゃんと拾えているのかどうか。「特徴的な取組」とは、即ち)運動なので、あまり運動しにくいところは多分入ってこないのでは。

【委員】

- ・ 数が沢山集まったと聞いてまず安心したが、結果から何を描き出すか。里地里山は普遍的な意味があると同時に極めて個別的なもの。沢山あるのが特徴ということではなくて、1箇所だけでも大変特徴的な里地里山がありうる。数値ではまとめられないものをどう拾い上げるかがこれからの問題。

【委員】

- ・ 今回の資料はラフに集計した結果だろう。作業のやり方が大事なポイント。アルバイトで機械的にやるのではなく、できるだけユニークな、おもしろい、その土地ならではのものを見つけようという目で集計すること。

【委員】

- ・ RDB種生息地の里地里山についても、意識的に拾ってほしい。

【委員】

- ・ 思ったよりも生物多様性保全に関わる取組の比率が増えているという印象。ただ、地元の関わりが薄くよそ者が取り組んでいる。例えば東日本ブロックのコナラ林。関東ではNGOの人たちなどが頑張っているが、まだまだいい里山の自然が残っている東北地方では、地元を巻き込んだような取組は少ない。どうやって地元の人たちに価値を認識してもらい取組を始めることができるのかが課題。
- ・ 保全活動のなかで外来種対策はどれくらいテーマになっているのかも分析してほしい。

【委員】

- ・ 都会側から地元で生物多様性について考えてほしいというとき、都会に住んでいる圧倒的な国民がどのくらい農業・農村を考えているのかも考えるべき。国民全体が両方を考えなければいけない。都市と農村の、都市民と農民のコミュニケーションが必要。

○議題2. 3. について

<事務局資料説明>

【委員】

- ・ 里山は農民にとって日常生活圏、だから集落からの比高は100~200mくらい。海拔ではなく比高、また、集落からの距離といったものが大事。
- ・ デジタルなデータでの分類や指標化、クロス分析といったアプローチで、果たしてストーリーが描けるのかどうか。

【委員】

- ・ 朝日新聞の「にほんの里100選」でも、いろいろな立地からアンケートが出てきている。全く別の方法で独自に分析してみたが、同じような類型になった。考え方としては大きく違ってない。(このような整理分析は、)全国を網羅したやり方としてそれなりの意義があると

思う。

【委員】

- 同様の感想を持ったが、ただ、参考資料（全国里地里山分布図）では、白神、森吉山、和賀のあたりが真っ白。和歌山・奈良の南部、三重県、徳島の南部、高知東部あたりも抜けている。東北は、採草放牧地が結構集落から遠いところにある。里地里山とするかどうか議論もあるが、生物多様性からいうと結構重要な地域。里地里山を抽出する基準を少しゆるめて白いところを減らした方がよい。

【委員】

- もともとの里地里山のベースから林業地が完璧に抜けている。和歌山や四国、九州が抜けるのはそのため。林業地が完全に抜けてしまって良いのかという点については、躊躇がある。
- 九州の造林地はもともと焼き畑をやっていたところ。水田から造林地になったところもある。和歌山の急峻なところの里は、水田を中心とした里ではなくて畑も尾根の上にならないうような非常に特殊なところ。こういうところがスクリーニングで抜けてしまうのは仕方がないが、今回抽出したもの以外にもこういうものもあるという前提で進めるべき。

【委員】

- メッシュで 1985 年と 95 年を比較する研究をやったが、条件不利農地に木を植えて撤退したとか、共同牧場に木を植えたとかいろいろなケースがあった。1960 年～70 年あたりをターゲットにするのなら、現況だけでは活動は捕捉できないおそれがある。
- 東北の土地利用はかなり離れたところに連携している部分がある。一つを中心からの距離で取っていくという方法で果たしていいのか。

【委員】

- SATOYAMA イニシアティブの目的は、今ある里地里山を維持することではないはず。奥山周辺や中山間地帯の放棄され荒廃している里地里山が出てきていない。それらをどうしていくのかというアイデア、典型的な事例がいくつか出てこないといけない。

【委員】

- 課題の抽出は社会的、経済的側面にほぼ限定されているように思える。人間の側の問題と自然の劣化と両面取り上げてその間にある課題を抽出するのがここでのミッションではないか。今は、バランスが人間の方に偏りすぎている。
- その間の関係性を見るには、生態系サービスという観点もあるが、多様な主体が問題をどう認識しているのかを記述的に整理する方法も考えられる。

【委員】

- 現地で聞き取り調査などをするとき、現時点だけでなく将来に向けての保全・再生のシナリオのようなものも聞いているのか。

【委員】

- ・ 未来に引き継ぐ手法のイメージ図は、単に社会学的な地域経営論になっているのではないか。里地里山で引き継ぐべきは、まさに衣食住すべてを支えているいきもののいる環境の生態系サービス。生きものの部分を切り離してしまうとお金、人、コーディネーターという部分だけ出てきてしまう。

【委員】

- ・ デジタルなデータは、里地里山の保全活用のシナリオに説得力を持たせるために必要になるもの。ただつくるというものではない。
- ・ 今回の資料は全国の里地里山を都市化の程度と距離で分類しているが、必ずしもこれだけでいいのか。市街地や奥山、植林地といった里地里山以外の部分も含めたシナリオに対応する図にしたほうが良いのではないか。むしろ全国3つくらいの分類で日本の里地里山の現状を説明したほうが有効という気がする。最後の出し方は少し考えたらどうか。

○議題4. について

＜事務局資料説明＞

＜質問・意見＞

【委員】

- ・ 北海道の里地里山をシラカバ林地域としているのは疑問。シラカバ林は火事などで一次的に成立し純林状になる林で持続的ではなく、自然の恵みの利用という面でも役割を果たしてきたとは考えられない。北海道の里山の基本はやはりミズナラ林とか海岸近くではカシワ林。
- ・ 北海道には縄文遺跡が多いが、そこでの情報からは、ミズナラとか多様な落葉樹がある林をそのまま利用していたと思われる。西日本の方ほど利用によって大きく植生が変わることはなくて、縄文時代とそれほど変わらない森林も若干残っていると思われる。

【委員】

- ・ 同意見。やはり落葉樹混合林文化。原生的自然の中に様々な植物を利用し、広い範囲で暮らしていたのがアイヌ文化。実は原生的なものへの依存の方が高い。
- ・ 東北の落葉広葉樹の里山にシラカバ林を対応させるのは無理がある。材とか利用資源としても非常に質の悪いものなので、結局皆伐、植林という大きな流れの方に行った。

【委員】

- ・ 里山というものを一つのものにまとめてしまおうとする整理の仕方は一番危険。むしろ「日本」の里山というものは実はないと認識すべき。飛鳥時代までは北海道も東北も九州も関東と大和も違っていた。里山は日本という国がつくったのではなくて、そこで生活していた人々が生業の中からつくってきたもの。こういう形でひとつにまとめてしまうと里山の理解をむしろそぐのではないか。

【事務局】 → 里山の本質は地方ごとに違うが、技と智恵としくみという三つの関係は、タ

イブは異なっても共通しているはずと考えた。

【委員】

- ・ 今の議論は、里地里山をきちっと類型化したり、歴史的な発展段階を整理して進化論的にとらえるのか、むしろこうすると必ず進歩、発展するという考え方ではなくて、それぞれの場所の自然風土によって地域の人たちがいろいろなやり方をしてきて、発展段階もいろいろという、まさに多様性でとらえるのか、どの立場で SATOYAMA イニシアティブを世界に発信するのか、という問題のような気がする。

【委員】

- ・ 今回のアンケートは、この三つの要素を中心にしたら良かったのではと思う。
- ・ 事例の取り上げ方について気になるのは、三富新田は数値的に非常にわかりやすい例だが、縦の列状の新田管理は全国でここだけ。兵庫の菊炭、琵琶湖の水源もやはりここだけ。一般例があってそれをわかりやすくするために特殊例があるならいいが、特殊例がいきなり出ている。

【委員】

- ・ 資料の図は整理としてはいいが、構造の説明。世界の人に里地里山がこれだけ生物や景観、文化の多様性に富むところというのを直感的にアピールするにはどうすればよいのか。
- ・ 日本のそれぞれの地域でそれぞれの自然に対応して、なんとかその自然の中で食っていくためにやってきた活動の集合体が日本の里地里山で、その結果として地域性、固有性のすごく高い種とか、日本列島全体でみるとモザイクみたいな景観ができた。
- ・ 人がかかわっていても、統一的な思想だとか政権がやったわけではなくて、それぞれの地域の神様を生かしながらやった結果として非常に多様なものになったというのを何とかうまく表現できないか。

【委員】

- ・ 人の営み、自然とのかかわりが出てこない。世界に日本人が持つ自然観、欧米と違う自然観として何を発信したいのか。
- ・ 20 数年前、日本の田舎で明治生まれの人を対象に3年間歴史学を勉強したが、そのとき資源は無限ではなく少しずつ持続型の利用をしていくという賢明な人たちにいっぱい出会って感銘を受けた。これは地球が必要としている自然観だと思った。
- ・ 気候や地理条件の多様性、その中から生まれてきた人の暮らし、自然との関わりというようなものが最後に出てきてほしい。

【委員】

- ・ 江戸時代は里山と農地、東京湾がつながっていて、江戸前寿司があった。昔は一体となっていたからうまくいっていた。だから、里山だけでなく都市そのものの矛盾も一緒に考えなければいけない。エコロジカル・フットプリントとかバーチャルウォーターとかの話なくしては解決できない。里地里山だけで何かしろというのは無理。

- ・ 焼き畑文化は実は日本全国にあった。気候的、土壌的条件からそれが可能だった。そういうことを強調すべき。
- ・ また、里地里山の多様性を生み出しているのは気候とともに地形。朝日の百選候補地をみても、非常にモザイク的な地形が里の多様性を生み出しているという例がたくさんある。そういう多様性をもっと強調する筋にしてほしい。

【委員】

- ・ なぜ SATOYAMA イニシアティブが大切かという、今の地球を救うには日本人の自然観を訴える以外にないと思うから。西欧人に人と自然の共生を説明しても、頭で理解されてもなかなかハラには収まらない。日本人なら感覚的にわかるのだが。
- ・ 人と自然の共生が典型的に景観としてあらわれているのが里山。東北の里山と九州の里山は違うが、もともと共通するコンセプトがある。だから里山という普遍的にまとめられる景観がある。そのコンセプトは地球のサステナビリティを考える上で最も大切なものということ訴えるような形でまとめてほしい。

【委員】

- ・ まとめる方向としては、二段構えにしたらどうか。キーワードとして生物多様性、低炭素社会、循環型社会、この三つを実現している里山で絶対多数をまずとって、さらに様々な取組の中でこれらと対等なレベルのものを引き揚げる。
- ・ 研究上の集積があるものや確認できる証拠があるものを第1にする。また、一番出てくるマツ型とかナラ型を中心にして戦略を立てる。

【委員】

- ・ 日本だけでなく定住型の生活があった場所では、その特性をよく理解した上での自然環境の持続可能な使い方というものが普遍的にあったのではないか。最近よく話題に上るスペインのデュエサというシステムも落葉樹の下で家畜を育てながら小さな畑のようなものをつくる。若干モザイク性もある。
- ・ ヨーロッパなどでは農業環境政策として少しでも景観要素、モザイクのパッチの多様性を高める取組が始まっている。IUCN のマクニリーを中心とするグループがエコアグリカルチャーの概念を提唱していて、グッドプラクティスを集める取組を進めている。そういう例の一つとして日本の里山に位置づけを持たせるとよい。
- ・ 国際的にも、食料の安全保障や環境にマッチしたものとして生業的な農業の見直しが始まっている。このような枠組みの中だとかなり一般性を持つような里地里山の整理の仕方ができるのではないか。

【委員】

- ・ 伝統的な利用管理手法に関連して、もっと取り上げて検討すべきなのは、食の文化の多様性。地域ごとに素材や加工にそれぞれ特徴がある。単に持続可能な使い方というだけでなく、付加価値の付け方にも特徴がある例がたくさんある。今でも経済的価値を持つ可能性がある。

【委員】

- ・ COP10 でモデルとして紹介するのであれば、農薬、化学肥料の使用状況についてもチェックした方がよい。

【委員】

- ・ 北上山地の 80 代くらいのじっちゃん、ぼっちゃんと日常的に接しているが、彼らは分をわかまえているというか、これ以上やったらだめだというバランス感覚を、自然に身につけている。資料 4 の図には、そういう倫理とか自然観のようなものを組み込んでいった方がいい。

【委員】

- ・ SATOYAMA イニシアティブの紹介資料を読んだが、英語でそういうことを書いたり話したりするのは、大変チャレンジングな点があると思う。特徴を主張しながら普遍性もバランスよくもたせる。あまりウェットで情が入りすぎると耳に入りづらくなる。
- ・ ある欧米人と話をしたが、その人は世界の資源を消費しながら国内の自然を大事にするという日本人にエゴイズムを感じて SATOYAMA イニシアティブには耳を閉ざしているところがあった。
- ・ SATOYAMA イニシアティブや里山論には抵抗を持っている人もいるということも参考にして、世界にもっていくときには、支持者だけでなく WWF とかグリーンピースとかの声の大きなグループともうまくコミュニケーションして健全な議論が運ばれるようにした方がよいと思う。

【委員】

- ・ 日本人は自然といいつきあいばかりしてきたというのほうそ。近世まではうまくやっていたが、少なくともここ半世紀はとんでもない失敗をした。だから外にだけ自慢するという話ではなく、自分たち自身が反省する。それを子供たちに環境教育のような形で伝えることが大事。
- ・ 今日はいくさんご意見を頂いたが、要は一つのストーリーではなさそうということ。日本の気候や地形の多様さ、そこから農法や暮らし方、自然との多様なつきあい方が生まれてきたというような一般論については、全委員が共通して考えていること。
- ・ 一方、こういう路線でやろうと具体的に呼びかける話になると、抽象論は意味がなくなる。何を言うためにその事例を使うのか。そのために個別に事例をピックアップしたらよい。すべての事例は、本来は全部特殊例。どう説明するのが問題。一つずつ例を並べてその中で普遍性を説明できればよいのではないか。

【環境省】

- ・ 3 回にわたって委員会に参加いただき御礼申し上げます。ご支援のおかげでアンケート回答も 600 件を超えることができた。肝心なのは、これらの事例から何を引き出していくのかということ。世界に訴えるために、それを支える事例、普遍的なもの、また個別的だが非常に重要な特徴を持っているものを拾い出していきたい。
- ・ 生物多様性の面から大事な里地里山の把握については、平行して日本全体の中で生物多様性

ホットスポットとして大事な場所を拾い出す作業を進めており、その中でも里地里山地域はかなり主要な部分として出てくるのではないかと、そういう作業も生かして日本全体の中で生物多様性の面から力を入れるべきところを把握していきたい。

- **SATOYAMA** イニシアティブを世界に広めていく取組の第一歩として明後日、アジアの人を中心としたワークショップを開催し、農村社会を核とした二次的自然環境の質を高めつつ自然資源を持続的に利用する方策を考えていくこととしている。
- また、4月からは、国連大学と環境省の共同事業としてアフリカでのワークショップやCOP10に向けた準備会合をアジア以外の国でも開催し、世界に広げるステップを進めていくこととしている。
- 国連大学は国内外の研究者の参加による「里山里海・サブグローバル・アセスメント」を進めているが、そこから得られる科学的な知見もこの場での議論につなげていきたい。
- 今日は次年度の第2ステージにつながる貴重なご意見を頂いたが、2年目もまたこの検討会を動かしていきたいと思っているので、引き続きよろしくお願ひしたい。

以上